

透析医のひとりごと

「私の受けたい末期腎不全治療」 前田貞亮

もし筆者が慢性腎不全になり、その治療法の選択をせねばならなくなった時どうするか？「あなたはどの治療法を選びますか」日本腎臓学会、日本透析医学会、日本移植学会共同で作成した『腎不全治療選択のための小冊子』を前にして考えていた。

そこへ、第27回日本医工学治療学会学術大会（平成23年4月22日、23日、24日・岡山コンベンションセンター：大会長、平松信：岡山済生会総合病院）のプログラムが届いた。「多様化する透析医療」というテーマでワークショップが組まれていた。

まず、腹膜透析（PD）の modality や透析液の処方が多様化により、従来、勤労者や小児などの若年者の治療法として捉えられていたPDが、腹膜アクセスにも多種多様なカテーテルが登場し、高齢者や寝たきり患者にも最適な治療法として選択の幅が拡大して良好な成績が報告されている。さらに多様化する透析医療はPDと血液透析（HD）の併用療法がすすめられ、PDの特徴である残存腎機能の保持に優れていること、持続的にゆっくり除水や溶質除去が行われるため、心血管系に対する影響が少ないことがあげられている。しかし、水分、溶質の除去効率が悪いという欠点を補うため、HDとの併用、あるいはPDファーストから、HD併用という方法を行っている施設の演題もある。また、1回6～8時間の長時間HDによる食塩制限の大幅な緩和と、高血圧と栄養失調を同時に改善するという7年間の成績を見ている抄録がある。

あるいは、透析施設において行う午後7時から翌朝7時までのオーバーナイト血液透析を中心に、在宅にて血液透析を行うHHD（ホームヘモダイアリシス）（1回平均2.7時間、週4～7回）、またその中で在宅でのオーバーナイトHD（1回5～8時間、週4～7回）の検討をまとめている成績が抄録されている。オーバーナイトHDのほとんどの人は、透析時間の長さや回数が気にならないと答えており、昼間、普通の人々と変わらない仕事量をこなす、体力的にも劣らず、余暇も楽しんでいるという。“施設のオーバーナイトHDがなくなったら”の質問に、半数の人はHHDをすると答えているという。オーバーナイト透析は十分な睡眠がとれて、翌日元気で仕事ができることが条件で、昼間のHDを夜間帯（睡眠時間帯）に行うのではないという認識が必要であることが強調されている。これは安全性の観点から血圧を測定しなくても無症状透析が可能である条件設定や、消灯しても監視できるモニター、漏血センサーの使用等、工夫も必要であるということである。

いずれにしろ、現在は施設HD、施設HDFが基調ではあるが、PD、HD、オーバーナイトHDなど、それらの方法の組み合わせなども含めて、今や「透析療法の多様化の時代」といってよいであろう。

翻って筆者は、自らの四肢の爪周囲炎の治療等を受けている現状から考えても、医療職とはいえ、休日に自宅で自らの治療処置をすることは面倒であると感じる。毎日の勤務の時間帯を除いて治療を受けられる便利さに感謝している。自分の施設で治療を受けるので、専門病院に日々通院しなくて済むことは大変楽である。

本論にもどって、腎不全で透析療法か腎移植が必要になったとしたら、腎移植は理論的には生命をつなぐ生物としての本質につながるのだから、これが第一であるべきだが、移植に伴う必要な薬剤の副作用が大なり小なりありうるので、これを拒絶すれば腎移植は望めないであろう。

次に日本の透析療法創生期の頃、PD療法は腹膜の機能の研究とともに筆者も努力し学会（海外をも含め）でも発表した。爪周囲炎もあって、現在は自力で操作はできない。専門ナースに往診してもらうなら未だしも、家族に手伝ってもらうのも大変迷惑な話である。もう一つの理由は、東北大学の故熊谷教授が肺結核の治療に人工気胸療法を導入した時、生体適合性という概念がなかった時代、恩師柿沼昊作先生が「体内に異物を入れる方法は何れ廃れるよ」といわれたことがどうも忘れられない。柿沼先生が言われたように、人工気胸療法は胸水貯留、胸膜肥厚などの副作用で廃れた。PDも腹膜硬化（腹膜硬化になったとしても、あなたは、あと何年、生きるつもりなんですか、と言われそうだが）という副作用——随伴症状は避けられない。腹膜硬化と軽いイレウスでPDを中止した患者さんが、HDの導入後他院から紹介された。その後HDを続け安定した後、遠方の専門の先生に手術の依頼をしたことも二、三例ある。

筆者が患者になったら血液透析療法であればやってもらいたいが、自分でやるのはいや、安心して任せられる施設でオーバーナイト血液透析療法を受けるであろう（腎不全ではないが、日常の食事療法には自己管理を含めて十分できているという自負はあるので）とつぶやいている。

（追記：医工学会当日、筆者が各演者に自分が腎不全になったら何の治療を受けたいかと問うた所、各人すべて「自ら発表した方法で治療を受けたい」と答える場面は会場が笑いで終わった）

前田記念腎研究所（神奈川県）